

思い出の記録集

2015 年 8 月 10 日

M②幹事 井上理文

今回紹介するのは、参加者の一人 西田行延君(元松下電工専務取締役)が持参してくれた東日本大震災に関するアーカイブで、3年を経過した被災地を春・夏の2回に亘って訪れ、その現状を写真に収め、パソコンを活用して編集し、手造りの製本でその記録を冊子に纏めたものである。約1年前の記録であるが貴重な作品であるので敢えてここに採り上げた次第である。

東日本大震災被災地を訪ねて

M② 西田行延

私は、高校時代より人文科学(主として地歴や文学)に親しみをもち、且つ野山を歩き社寺を訪ねて散文を綴るのを趣味として、理工系に進学することは念頭になく、戦後の混乱期と云う事情もあって、高校3年の修得科目が、国語・英語・日本史・世界史・化学で、数学の単位零で卒業、大学入学後も教養課程最初の学期の取得単位は英語3教科とドイツ語2教科と云う有様で、奨学金を給附されていた育英会から支給停止の注意を受けた程のM②の劣等生でした。この進路変更は或る事情によるものでしたが、当時既に両親は他界し、学資は奨学金、生活費はアルバイトでと云う学生生活は決して青春を謳歌するどころではなく、その上、理工系素養の欠如を補うことは容易ではなく、専門課程で漸く教養課程の単位も取得すると云った苦勞に明け暮れた学生時代でした。しかも卒業時は朝鮮戦争特需の反動期に重なり、十数社への就活も空しく、卒業を間近に控えた年末に漸く二次募集の企業に採用が決まって安堵したものでした。しかしその会社は、戦後激しい労働争議により、経営破綻の危機に直面していたと聞かされ、希望よりも不安に駆られながらの入社でしたが、松下幸之助創業者が会長であったことが唯一の心の支えでありました。初任給1万円(見習期間の6ヶ月間は8000 円)で、初めての給料を手に購入したのは、写真フィルムの現像、印画紙への引伸と焼付等の器材でした。卒業間際に飲まず食わずで貯めて手に入れたオリンパス 35(カメラ)とともに、素人写真の遍歴がここから始まることになりました。その後高度経済成長期に入ると、政府による個人の持家奨励策もあって、社業の電設資材や建築部材が脚光を浴び、会社の業容も安定成長へと向かい、品質・デリバリー・コストの3要素の革新が求められるようになって、生産技術の分野に従事していた私は、その第一線で欧米の先進技術の導入と活用、更にその向上を求めて活動することになりました。そして次第に、自動量産設備の導入は固より、生産技術の革新に基づく商品の開発など、製造・営業両部門の間であって広汎な業務に関わりをもつようになって行きました。その後私は、幸運にも恵まれ、技術部門から制御機器事業本部の本部長となり会社経営の一角を担うことになりました。プラザ合意に基づく急激な円高は、輸出依存度の高かった事業が危殆に瀕する局面に見舞われましたが、他社に先駆け「世界四極体制」と称する日・米・欧・亜のそれぞれの需要拠点に最新技術による工場を設立、為替変動に影響されないグローバルな仕組みを作って対応しました。その際の工場立地や現地人によるガバナンス体制の確立など大変な苦勞もありましたが、今では懐かしい思い出となっています。このような体験を通じて、私の仕事の運びを円滑にすることに役立ったことは、人文科学系大学進学を夢見て培っていたその分野の知見でした。昨今大学の人文系教育を軽視するやの声が聞こえてきますが、とんでもないことで、我田引水になりますが、寧ろ理工系志望者こそもっと人文科学の造詣を深めて進学されるべきところと思います。横道に逸れましたが、この頃の私にとって、ワープロとの出会いは、今まで手書きで文書を作成していたことからの解放と同時に、より円滑な意思の疎通に重要な役割を果たすことになりました。Pocket Oasis は常時携帯してメモや文書の作成に欠かせない道具となりましたし、更に Windows 95 が現れると、画像を取り込んだ文書作成が容易になり、いつかは自分の意思を活字にしたいという長年の願望が叶えられるとともに、公私に亘って大いに活用することになりました。現役引退後はパソコンのハード・ソフトの進歩、デジタル写真化の流れが急速に進み、今までの写真アルバムを画像付きの記録文書に置き換えることから始まり、いつかそれらは人生の足跡としてテーマ毎に整理して、「聖書の世界を訪ねて」「南米大陸駆けある記」「ガンダーラ文化を訪ねて」「ベトナム縦断記」「韓国紀行」「私の世界遺産遍歴」等の海外紀行、「平成東海道膝栗毛」「平成中山道膝栗毛」「平成奥の細道紀行」「丹波紀行」「四国遍路」等の国内自転車ひとり旅の記録、「古都そのときどき」「京都歳時記」等の日常折に触れての写真抄録、「癌と宣告されてからの 70 日間」と云う闘病記録等々となって、「西田文庫」と名付け、装丁も含めてすべて手造りの世界無二の冊子造りに勤しむことになりました。20 年近い期間に製本?したものは 30 冊を超

え、一般書籍に交じって本棚に並んでいるのを見て独り悦に入っているのが現状です。

この度東日本大震災から満3年を迎え、その被害の状況が風化されない前にと、急に思い立って被災地を訪ねる旅に出ました。2度に亘って、主として大津波で罹災した、田老・陸中山田・大槌・大船渡・陸前高田・気仙沼・志津川などの三陸海岸、女川・石巻・松島・名取などの仙台湾沿岸、更に津波と原発事故の二重苦に喘ぐ相馬・富岡などを歴訪しました。そしてその記録を纏めて冊子にしたのが井上君により紹介された「春未だ来たらず」と「夏草茂る営みの跡」の2部作で、前者は国立国会図書館に納本?したところ、素人の手製のものにも拘わらず震災関連の資料として受理され、蔵書検索システムNDL-OPACで閲覧可能となっているとの通報を受けています。今回井上幹事からの要請を受け、その抄録をお届けしますが、拙文にてお見苦しいところはご容赦下さい。



「春未だ来たらず」(2014-4-15)「夏草茂る営みの跡」(2014-8-15)抄録

1、松島湾に沿って

七年前、私は芭蕉の「奥の細道」を訪ねる五百里の旅の途中に立ち寄った松島・石巻から今回の「東日本大震災被災地三歳の春」の旅を始めることにした。前回と同じく塩釜から船で松島を回遊して石巻に向かった。塩釜の市街地は震災の跡形もなく整備されていたが、船乗り場のマリンセンターのビルに着くと、入口1mほどの高さに「津波水位」の表示があり、更に屋内に歩をすすめホールに入ると、津波発生時の写真が展示されており、改めてその凄まじい光景を彷彿とさせる。乗船して出港し、仙石線の電車の高架の下、の浜一帯の、歯並びの悪いように点在する建物や、棲む人のいない家屋を見ると、津波による被害が未だ残っているのを知る。空は晴れているものの、風は冷たく強く吹き、白波の立つ中を船は松島に向かって櫂を切る。やがて松島湾を外海と区切るように並ぶ島々の間を抜ける。その一つ小藻根島を間近に望む地点に差し掛かると、「この島には嘗ては、小舟で通り抜けができた長命穴と云われる穴があったが、今回の震災によって破壊された」と、船内の案内放送が伝えてくれた。松島海岸一帯が他の隣接する地域と比べ、津波の被害が僅少に止まったのは、小藻根島を含む湾内に点在する無数の島々が自然の防波堤の役割を果たしたことが大きいと考えられる。松島湾は牡蠣の養殖でもわが国有数の漁獲高を誇っていたが、津波によってその筏が無残な姿をさらしていた。松島の海岸通りは、三年前の大震災が嘘であったかのように、今日も大勢の観光客で賑わっていた。



JR 仙石線東名駅跡付近

石巻に向かうために、人々の間を縫ってJR松島海岸駅に急ぐ。仙石線は現在も途中が不通で、この駅より代行輸送のバスに乗る。しばらくすると線路が跡形もなく流されたことを示す箇所が見え隠れしてくる。「東名」で途中下車、次の駅「野蒜」まで歩く。国道沿いの真新しい民家に、津波の被害のそのまま放置されているのを見る。傷ましい姿を今後も風雨に曝し続けるのか、持主の止むに止まれぬ心情が伝わってくる。地震の震度は6弱であった地域で、津波さえなければこんなことにはならなかった筈で、改めて津波の恐ろしさに身をつまされる。野蒜駅に着く。駅は完全に破壊され復旧工事が酣であった。記録によれば、地震発生の直前。二編成の列車が同時にこの駅を発車、一つは石巻に、一つは仙台へと。そして、石巻行に乗り合わせた乗客・乗員は、安全のため車内で一夜を過ごすことになり、新聞紙で窓に目張りをしたり、車内にあったビニール袋で身体を覆って寒さを防ぎ、乗客が持参していた土産品の菓子や、夕食用の食糧などを互いに分け合って飢えを凌いだと云う。又仙台行に乗り合わせた乗客は、乗員の誘導によって高台の小学校に避難して難を免れた。その後電車は津波によって流されると云う間一髪対応だった。一時は両電車とも行方不明とされながらも、関係者の互いに協力し励ましあった甲斐あり、

無事全員が救出されたのであった。

石巻に着き、早速日和山公園に赴く。石巻を訪れた芭蕉・曾良は、「日和山と云へ上ル、石ノ巻中不残見ゆル」(曾良随行日記)とあるように眼下に旧北上川河口を見下ろす高台にあり市内が一望できる。嘗て奥の細道行脚でこの地に至り、曾良を伴った芭蕉の像の前に立った私は、「こがね花咲とよみて奉たる金花(華)山海上に見わたり、数百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて竈の煙立つけたり」の「奥の細道」の一節を思い起こし、韻文調の和漢混淆の文体に魅了されて、諄んじた中学時代に思いを馳せたものであったが、今この像の彼方に広がる赤茶化した広漠とした光景は、ひとときの感傷に浸ることを許すものではなかった。鉄筋コンクリートの建物の外郭だけを残して、樹木も家屋も根こそぎ流してしまった津波の威力に、改めて驚きと畏怖の念を抱かざるを得なかったのである。元来仙台藩の米の積出港として栄えてきた石巻であるが、慶長 18(1613)年支倉常長一行 180 名を乗せた慶長使節船「サン・ファン・パウティスタ」が、ローマに向けて出帆したのはこの石巻からであった。その 2 年前、マグニチュード8と推定される慶長三陸地震が発生、仙台藩の蒙った津波の被害は今回に匹敵するものであったと伝えられる。使節の目的は、この災害からの復興を狙ってのスペインとの交易にあったと云う。奇しくも 400 年後の今日、同様の事態を迎えた当地では、この先人の勇気・希望、そして未来への思いを胸に、復興への歩みを踏み出そうとしている。郊外の月浦には、その象徴としての慶長使節船ミュージアム「サン・ファン館」が新装再開されていた。先端に金華山を臨む牡鹿半島の基部に位置する女川に足を伸ばす。わが国有数の漁港のある港町で、全国トップクラスの秋刀魚の水揚げ量を誇っていたことで知られる。三方を山で囲まれた女川町を、今回の大地震で発生した津波が太平洋から深く入り込んだ細長い女川湾の奥に向かうにつれ、その地形が因となって勢力を増巾し、高さ14.8mの未曾有の最大高さを以て町の中心部を襲った。そして、約1万の町人口の8.3%に当たる827名の死者・行方不明者の犠牲をもたらし、4400棟の家屋に被害(このうち2924棟が全壊)を及ぼした。避難所にも指定されていた小高い丘の上に建つ女川町立病院も、一階の天井まで津波が押し寄せ、逃げ遅れた人々はそれにのみ込まれて命を落としたと聞く。JR石巻線は手前の浦宿駅から先が不通で、三年の歳月で赤錆た線路沿いを歩き女川に向かう。女川との境にある山のトンネル越しに、女川の出口側の赤茶化した光景が眼に映るが、ここから先は進入禁止である。国道398号に迂回して峠を越えると海が見えてくる。坂道を下って行くにつれて海との間の陸地は茶褐色の土の世界が広がってくるのみである。資材を積んだトラックや土砂を運ぶダンプカーがひっきりなしに行き交う度に舞う砂埃に悩まされる。海辺に近づく、基礎から抜かれて倒壊した鉄筋コンクリートの建物が彼処に転がっ



石巻日和山公園 芭蕉・曾良像の背後に広がる津波被災地



復元された慶長使節船

ている。女川駅も流出して、三年経った今、土地の人に訊ねても定かでない程跡形もない状態である。地名の由来が、前九年の役(1051~62)に源氏と対決した安倍貞任が、一族の女性と子供を避難させた土地を流れていた川を女川と呼んだことに因むとある。それ以来の大惨事であ



津波で横倒しになった鉄筋コンクリートの建物

ている。女川駅も流出して、三年経った今、土地の人に訊ねても定かでない程跡形もない状態である。地名の由来が、前九年の役(1051~62)に源氏と対決した安倍貞任が、一族の女性と子供を避難させた土地を流れていた川を女川と呼んだことに因むとある。それ以来の大惨事であ



土地の嵩上げが進む女川中心部と2階まで津波が押し寄せた町立病院



町立病院に掲げられている小学生の読んだ詩の一節の横断幕

ったことは疑う余地のないところであろうが、そんな悲惨な運命に遭遇した中で、女川の小学生が詠んだ「女川は流されたのではない 新しい女川に生まれ変わるんだ 人々は負けずに待ち続ける 新しい女川に住む喜びを感じるために」の詩には深い感動を覚える。地元の人々も大いに勇気付けられたに違いない。今日この詩の一節が町立病院に横断幕として掲げられ、試練に耐えて逞しく前進しようとする町民の姿を見守っている。町立病院の一隅に建てられた慰霊碑に合掌し、少学生の詩が一日も早く現実になる日を祈って女川の町を後にした。

2、南三陸海岸

石巻に戻り、JR石巻線・気仙沼線乗り継いで気仙沼に向かう。途中の柳津から先は震災で不通となっている。芭蕉も石巻から平泉へ向かう途次通過した柳津は、神亀3(726)年、聖武天皇の勅命を受けた行基が、東国を巡回してこの地に至り、自ら刻んだ一尺二寸の虚空蔵尊を安置する宝性院(日本三虚空蔵の一つ)の所在地である。柳津からはBRT(JR代行のバス高速輸送システム)に乗り換えて進む。早期の住民の足の確保の面から、被災したJR線路を撤去した後、舗装道路として専用バスを走らせるもので、元々単線の線路敷きのため道巾はバス一台で一杯であり、所々に対向車との待避所があったり、専用路への他車の進入を防ぐための遮断機が設けられたり、又鉄道並の信号機のシステムが整備されるなど、一般の路線バスとは大きく異なる運行形態である。それだけにこの専用道路上では快適で鉄道に等しい速度で走行するが、被災度の高い区間では一般道路を使用するため、天候の条件や定時運行などの面から、全般的な災害復旧絡みで、このシステムを恒久化するかどうかは今後の注目すべきところであろう。

志津川に入り愈々三陸の海岸地帯を北上する。車窓から見る志津川の中心部は津波によって砂漠のように変わり果てて、住民の姿は殆ど見かけない。最後まで町民に避難を呼びかけていた職員二十数名が犠牲となった南三陸町防災庁舎(屋上まで津波が達した)の赤色の鉄骨だけが痛々しい姿で残っている。行きかう車は殆ど復興にかけての土木工事関係のもので、土誇りが凄まじい。付近に住宅が見当たらない中で、それらの人々を対象にしてか、仮設建物のコンビニが店を開いていたのは、本来の特性を示す逞しさを感じさせるものであった。やがてバスは広い砂浜の広がる浜辺を走る。その向こうには穏やかな南三陸の海が春の光に眩しく照り映え



J R 気仙沼線代行 バス



悲劇の舞台となった南三陸町防災庁舎と仮設で営業中のコンビニ(右)



津波で破壊された陸前小泉付近の J R 気仙沼線鉄橋

漁業で栄えてきた町であり、気仙沼線と大船渡線(一関～気仙沼～盛)との交接地である。駅は港の背後地の高台にあり、津波の災害を免れたものの、大船渡へ向かう線路は途中消失し、この駅から終着駅の盛までは、今までと同様BRTの運行となる。津波の状況を撮影した写真で被害の大きかった港地区を訪れる。震災直後のような悲惨さは一応のぞかれた状態であるが、地盤沈下した街角には、基礎だけが残った建物跡が広がり、廃虚となった建物も幾つか見受

る。突如対照的にコンクリート製の橋桁が、真ん中でもぎ取られたように壊れて、鉄筋が剥き出しになったJR気仙沼線の鉄橋が車窓を過ぎる。海のもつ静と動、穏と乱の二つの相反する性状を垣間見る思いがした。

気仙沼は宮城県東北部に位置し、女川と並んで三陸



気仙沼港近くの津波と地盤沈下で放置されたままの土地

けられた。その一方で港は完全に修復され、ゆりかもめの飛び交う中、真新しいフェリーが出航していったし、復興屋台村と称する仮設商店街も店開きして、少しずつ元通りの生活へ戻りつつあるように感じられた。再びBRTに揺られ陸前高田・大船渡を目指す。

宮城県から岩手県へ、陸前高田市に入る。気仙川の手前、右手に鉄筋コンクリート三階建ての建物が目に入る。外壁のみしか残っていないところを見ると、建物全体が津波にのみ込まれたものと想像される。15m を超える津波が押し寄せたようである。気仙川を渡ると左は一面の赤茶化した原野で、ブルドーザーやダンプカーがコマネズミのように動き回っている。右に眼を転じるとひょろっとした一本の背の高い木が見える。2km に亘る名勝「高田松原」の、7 万本の松のうちの一本だけが津波に堪えて残ったもので、「奇跡の一本松」と呼ばれるものである。この松も暫くして海水に浸っていたことから枯死、その後震災のメモリアルとして、葉はレプリカ、幹はプラスチックを注入するなどして保存されることになった。陸前高田の中心市街地は津波により壊滅、今この広汎な地域全体に土盛りをして高潮や津波によって浸水しない造成工事が急ピッチで進められている。そのための土砂を運ぶ大規模なコンベヤーが、元市街地を覆うばかりに張り巡らされている光景は壮観である。地元で「希望の架け橋」と呼ばれるこのシステムは最新の土木技術を駆使したものであろうが、何時この工事は完了し住民がそこに再び居を構えることができるのか、未だ程遠いように思われる。震災

から既に三年、現在入居中の狭小な仮設集合住宅には色々な問題が指摘さ

れているが、高齢化・過疎化が急速に進む中で、真の人間らしい生活が一日も早く取り戻せることを願うばかりだ。

大船渡は後背地に石灰岩・蛇紋岩の鉱脈を有し、窯業・土石製品の出荷額が市の工業に占める比率が5割を占める。1960 年のチリ地震津波でも大きな被害を受けたが、臨海工業都市として復興してきた。今回はそれを大きく上回る10m を超える津波に臨海部は大きな損害を蒙った。港から国道 45 号を盛へ向かって歩く。北国の花の蕾は未だ固く、被災地の現状を象徴しているようである。瓦礫こそ取り除かれているものの、国道沿いには被災したままの状態で放置されている建物が目立つ。見上げる屋上に掲げられた津波の到達高さを示す板に、信じ難い思いを抱きながら進む。盛はJR大船渡線の終点であり、三陸鉄道の起点でもある。ここから三陸鉄道南リアス線乗り継いで釜石まで向かう積もりにしてきたが、生憎途中が未だ不通で、全線開通は数日後とのこと、他の交通手段もないことから、残念ながら引き返すことにした。



奇跡の一本松



一面荒野と化した元市街地を覆う巨大土砂搬送システム



津波で破壊された大船渡市国道45号沿いの建物

3、仙台平野

南三陸の旅を終えて仙台平野に降り立つ。仙台空港から北数キロ、名取川の河口付近に閑上の集落がある。仙台湾に面し今回の震災により仙台平野で最も大きな被害を受けた一つの地域である。名取駅からタクシーを駆って約 10 分、市街地を外れるに従って津波の傷跡が段々深くなってゆくの分かる。仙台平野の南端に位置するこの辺り、見渡す限りの平坦な荒野と化した土地に、ぽつんぽつんと家屋の廃墟が点在する。一見すれば女川や陸前高田と変わるところがないようだが、瓦礫



が撤去されたままで、復興に向けての土地造成が未だ手付かずの状態であるだけ、震災の生々しさが伝わってくる。未だに名取川と広浦に囲まれた三角州の嘗ての地区の中心地帯は、建築禁止区域に指定され、住民にとっては土地がありながら自宅を再建する計画さえ樹てられない状況で、破損家屋の修復や撤去の目途も立たず、仮設住宅での生活を余儀なくされていると云う。案内してくれたタクシーの女性運転手さんの家もこの地区にあったが津波で流され、今は職業の関係で民間アパート住んでいるが、一日も早くもとの場所に家を再建して暮らしたいと切実に訴えていた。地区の中で唯一そこだけ小高くなっ



名取市閑上地区 上：日和山 下：山上からの俯瞰

た日和山と呼ばれる小さな墳丘がある。津波から身を守るためこの丘に避難した人も多かったが、津波は容赦なくこの丘を越えて押し寄せ、松の木によじ登って難を避けた人を除いてすべて犠牲になったと云う。痛ましい話である。丘に登り慰霊碑に黙祷を捧げる。背後には一面に冬枯れした雑草に覆われた町の廃墟が広がる。それを横切って土盛りした自動車道が北から南へ走る。運転手さんの説明によれば、震災時この道路が防波堤の役割をして、内陸部への津波の被害を大きく軽減し、又道路上の高みに避難した人は九死に一生を得たと云う。今回の津波は想定を遙かに超えるものであったが、これに備える緊急の避難所を、生活の場の周辺に設置することの重要性をわれわれに示したものと云えよう。

4、福島浜通り

東北の震災地を巡る旅も、宮城・岩手を駆け足で訪ねて、最終の段階を迎え福島の浜通りに赴く。起点となる「いわき」(平)に入り、原発事故で立ち入り禁止になっている区域に、できるだけ近付ける範囲まで行くことにした。「いわき」から乗った常磐線の下り列車は二十数分で終着駅「広野」に着いた。ここから先約 100km は途中の一部の区間を除いて、津波と原発事故のため運転休止となっている。復旧の目途は全くない。



震災直後のままの JR 常磐線富岡駅

特に原ノ町までの間は、放射能汚染区域として立ち入り禁止に指定され、代替の交通手段もなく、磐城海岸沿いの通称浜通りは完全に途絶状態となっている。ホームに降り立つと震災以来列車の途絶えた錆び付いた線路が空しく北へ伸びている。駅前に駐車中のタクシーの運転手さんに、私の意向を伝え現地の事情を聴く。年配の彼の話によると、事故のあった福島第一原子力発電所から 10km 圏内ながら、比較的放射能の影響の少ない富岡町までは、夜間を除き立ち入りが認められていると云う。約 15km の距離でタクシーならば 15 分くらいで着くと云う。便数の少ない「いわき」への帰りの列車の時刻を確認し、現地の事情も案内してもらうことでタクシーに乗り込む。国道 6 号を北上する。原発関係者の車が激しく行き交う。途中、放射能汚染を除染した際に発生した廃棄物を一時的に保管している仮置場が随所に見受けられる。富岡町に入る。商店街は人氣が全くなく正にゴーストタウンである。店内を覗くと商品や備品が散乱したまま放置されていた。最近まで放射能汚染による立ち入りが制限されていたことによるものであろう。商店街から坂を下り駅に向かう。そこには震災直後から幾度かテレビや新聞で報道されていたままの状態が広がっていた。海に近く地震に加えて津波の被害を激しく被っていた。プラットフォームに流された乗用車の残骸、垂れ下がった架線に折れ曲がった支柱など、津波の威力をまざまざと映す光景である。慰霊碑越しに望む、今日の晴れ渡った空と青く照り映える海からは想像はできない。駅周辺を見渡すと、個人の住宅や商店はもとより、鉄筋の集合住宅まで大きく損壊、それが今まで整備や修



ゴーストタウンとなった富岡町商店街

入りに乗る。駅前に駐車中のタクシーの運転手さんに、私の意向を伝え現地の事情を聴く。年配の彼の話によると、事故のあった福島第一原子力発電所から 10km 圏内ながら、比較的放射能の影響の少ない富岡町までは、夜間を除き立ち入りが認められていると云う。約 15km の距離でタクシーならば 15 分くらいで着くと云う。便数の少ない「いわき」への帰りの列車の時刻を確認し、現地の事情も案内してもらうことでタクシーに乗り込む。国道 6 号を北上する。原発関係者の車が激しく行き交う。途中、放射能汚染を除染した際に発生した廃棄物を一時的に保管している仮置場が随所に見受けられる。富岡町に入る。商店街は人氣が全くなく正にゴーストタウンである。店内を覗くと商品や備品が散乱したまま放置されていた。最近まで放射能汚染による立ち入りが制限されていたことによるものであろう。商店街から坂を下り駅に向かう。そこには震災直後から幾度かテレビや新聞で報道されていたままの状態が広がっていた。海に近く地震に加えて津波の被害を激しく被っていた。プラットフォームに流された乗用車の残骸、垂れ下がった架線に折れ曲がった支柱など、津波の威力をまざまざと映す光景である。慰霊碑越しに望む、今日の晴れ渡った空と青く照り映える海からは想像はできない。駅周辺を見渡すと、個人の住宅や商店はもとより、鉄筋の集合住宅まで大きく損壊、それが今まで整備や修



J R 常磐線富岡駅跡

復もできない状況に放置されてきたのは、他の被災地より原発事故と云う一層苛酷な条件が加えられたことによるもので、その惨状の痛々しさに胸が打たれるとともに、改めて原発を重要なベースロード電源とする国のエネルギー政策に不信の念を抱く。復旧への目途が立たない中で、町民を不安に駆らせている事に犯罪の増加があるという。住民も夜間立ち入り禁止のため、それを狙った窃盗事件が続発、他府県からの応援依存による土地の事情に不慣れな警備体制



放射性物質を含む瓦礫の一時保管場所

もあって、検挙率は極めて低いと云う。そのため住宅の横に自家用車を駐車させて、家主が住んでいるように見せかける自衛手段をとっていることもあ

ると云う。復興予算の一兆円を越す多額の歳費が、全く関係のない県で費消されたと云うが、どうしてこのような被災住民の不安を取り除くことに積極的に活用できないのか、この国の縦割り行政の欠陥と一部役人の

利権本能に腹立たしさを感じる。放射能汚染物質の除染や除去も、現地では緊急の課題であるが、本質的な面に於いて余り進んでいないようである。そもそも汚染物質を生活環境から完全に、或いは人が安心して暮らせるように、除去することが可能であろうか。屋根に付着した汚染塵を除染しても、庭の汚染土を除去しても、周辺の山や野原を含む該当地域すべてに亘って汚染物質が無くならない限り、風や雨などの自然現象によって、再度汚染されることもあり得るわけで、大いに疑問とされるところである。途方もない労力と費用を長期間かけて本当に効果が得られるのだろうか。この仕事に従事している人の間にも疑問視する声が出始めているようである。又地震や津波で発生した瓦礫の処理も放射能に汚染されていると云う理由で、本質的な処理は進んでいない。町角に黒い袋に入れて仮置きされたり、山林を切り開いた広大な土地に野積みされた状態である。現在福島県でのこれらの廃棄物の量は11万トンを超えており今後も増え続ける見込みであるが、被災後三年を経た今も、国及び地方自治体に於ける根本的な施策は明確になっていない。今この地域では福島第一原発の事故の後始末のために、自衛隊、東京電力を始め関係企業や団体の多くの人々が集結、昼夜を分かたず尽力している。富岡町総合スポーツセンターの一部に、Jビレッジ・スタジアムがある。嘗てわが国最大のサッカー・トレーニング施設として、1997年東京電力が約130億円をかけ、5000人収容のサッカースタジアムや屋内トレーニング施設等を建設、福島県に寄贈、その後福島県、日本サッカー協会、東京電力がそれぞれ10%出資する日本フットボールビレッジが設立され、管理・運営に当たってきたものである。当時この施設寄贈について、福島第二原発の原子炉増設の見返りとの指摘があったとされるが、今この施設全体に仮設集合住宅が建設され、東京電力福島第一原発事故の処理に当たる人々の宿舎になっているとは皮肉なことである。

福島県内では、空気中の放射能を測定・表示するモニタリング・ポストが県内各地に設置されている。富岡駅の前に設置されたものでは、 $0.372 \mu\text{Gy/h}$ (マイクログレイ/時間 大気中の放射線量1グレイは1シーベルトに換算される)を示していた(2014年3月31日8時50分)。この数値は国際放射線防護委員会が定めた平常時の被曝限度年1ミリシーベルトからすると約3,26倍である。24時間屋外の空気に曝されているわけではないにしても、自然界からの放射線被曝量0.04マイクロシーベルト/時からすれば異常に高い値で、国の「放射性物質汚染対処特別措置法」に基づく除染の長期目標値毎時0.23マイクロシーベルト(被曝を屋外8時間、屋内16時間として算定)をも遙かに超えるものであった。因みにこの1時間後、福島第一原発から25km離れた広野駅前のモニタリングポストでは $0.162 \mu\text{Sy/h}$ であった。僅かの時間とは云え高度の放射線に曝されていたことに、不気味さを感じたが、今尚常時この環境下に生活を余儀なくされている現地の人々の不安の程が推し量られた。譬え許容基準内といっても、目に見えず、変動要素を抱えての長期間の影響は、常に安心と云えるものではない。チェリノブイリでは毎時の被曝量が、0.09マイクロシーベルトで子供が変調を来し、0.16マイクロシーベルトを浴びた大人が5年未満で白血病になったという報告もある。案



撤去もされないまま放置の倒壊建物



嘗てのJヴィレッジ



放射能モニタリングポスト



立ち入り禁止区域への進入を規制する警官

内してくれたタクシーの運転手さんは、別れる際に、「いわきに着いたら必ず衣服を払い手を洗って嗽をして下さい」と繰り返し忠告してくれた。事前に問い合わせた富岡町の役場の職員の方も、必ずマスクをしてできれば防護服の着用を勧めていたが、それ程に科学的に安全だと云われていても、われわれの想像以上に現地での放射能に対する恐怖感の強いことを認識させられた次第である。

現在富岡町を含む原発事故に伴う避難指定区域からの避難生活者は約2万9000世帯、8万1000人で、その帰還見通しは全くない状況である。平成24年12月に復興庁・福島県・富岡町が行った満18歳以上の富岡町全住民13,191人に対する調査(回答率57.9%)では、震災後、家族が2~4ヶ所に分散避難しているのが35.0%、又福島県外への移住者が26.9%と云う数字が出ており、多数の住民が住んでいた家を追われ、帰る土地も奪われた状態で、不自由な生活を強いられている。更に仮設住宅での孤独死や自殺などの災害関連死が津波などによる直接死を上回ってきたとも報道されている。そしてこの状態が続いて行けば地域のコミュニティがいずれ崩壊の危機に直面することも否めないところであろう。自然災害だけならば、それを乗り越え生きて行く知恵を昔から有していても、原発事故と云う未経験の災害を克服するには相当の歳月が必要なようである。改めて原発事故の罪の大きさを知る。

5、宮古・田老 (この項以降は「夏草茂る営みの跡」から)

三陸海岸の中でも、田老は津波太郎の異名をとる程、古来津波に襲われることが多かった土地である。江戸時代初期、1611年の慶長三陸地震津波で、村が全滅したと云う記録が残っている。1896(明治29)年の明治三陸津波では、当時の田老村345戸のすべてが流失、人口2248人のうち1867人(全体の83%)の住民が死亡、生存者は出漁中の漁師と山仕事に従事していた者のみであったと云う。昭和8(1933)年の昭和三陸津波では、一家全滅66戸を含む、559戸中500戸が流失、死亡・行方不明者は2773人中911人(全体の32%)であった。震災後内務省と岩手県は、集落の高所移転を復興策としたが、地形上高所移転の土地確保の困難性、海岸から離れることによる主要産業の漁業への支障などの理由から、高所移転の復興策の費用を転用しての防潮堤建造を中心とした対策となった。第一期工事は昭和9(1934)年に着手したが、日中戦争の拡大に伴う国の資金不足や資材の枯渇などから、昭和15(1940)年中断、戦後になって地元の強い要請のもと、昭和29(1954)年工事再開、着工から24年を経た昭和33(1958)年、悲願の第一期防潮堤は竣工した。全長1350m、基底部の最大巾25m、地上高さ7.7m、海面高さ10mの壮大なものだった。昭和35(1960)年のチリ地震津波の襲来では、三陸地方の他の地区で多くの犠牲者が出たが、田老では無被害であった。これには、田老での津波高さが3.5mで、堤防に達していなかったことによるところが大であったが、防潮堤の効果とする誤った報道が流れたため、これを機に田老の防潮堤への関心が国内外で昂まり、「防災の町」として有名になった田老を視察に訪れる向きが増大した。その後も二度に亘って増設(第二・第三期)が続き、昭和41(1966)年、総延長2433mのX字型の巨大な防潮堤が、城壁のように市街地を取り囲んで完成した。そして新防潮堤と旧防潮堤の間に次々と浜小屋が建ち、何年か平穏な歳月が流れるに従って、民家がこれに続いて建ち並び、加速度的に新市街地が形成されていった。堤防が造られる前の旧市街地は碁盤の目のように整然とし、浜からの道は山へと直線的に延びて、津波の際の避難を優先して形成されていたが、堤防を過信した新市街地では無秩序に伸びた道に、津波の際の避難への配慮は薄らいでいた。第一期の防潮堤が津波を沢沿いに導きその勢力を和らげ、堤防内の住民の避難する時間を稼ぐことを考慮したのに対し、第二期の防潮堤は津波に真正面に立ち向かい阻止することを意図したものであった。今回の大津波はすべての堤防を乗り越え、大惨事をもたらしたものの、後者の堤防が瞬時に倒壊したのに対して、前者は原形を留めていた。自然の猛威は人智を遙かに超えるものであることを改めて認識するものであるが、自然の摂理に順応することの大切さも気付かされる場所である。今回の大津波の最大波は8.5m以上、遡上高さは田老小堀内地区で17.9mとされているが、津波の田



田老の三つの防潮堤と市街地



老町への到達には地震発生後 4 時間が経過していた。それなのに、家屋 1467 棟のうち全壊・流失が 979 棟(66.7%)は致し方ないとしても、人口 4302 人に対して犠牲者 166 人を出したことは、70 年を超える平穏な歳月の間に、万里の長城的大防潮堤による安全神話が根付いていたためであろうか。悲しい話である。

三陸鉄道田老駅を後に国道 45 号を北にとると、第一期防潮堤の南端に出る。全長 1350m のコンクリートの巨大な壁が北に延びている。左はこの堤防を乗り越えた大津波によって破壊された旧市街の跡地で、右は海側の第三堤防との間に形成された新市街地跡で、瓦礫が除去された後には、一面に夏草がはびこっている。昭和三陸津波後、旧市街にあった一部の住宅

や寺院・学校は山裾の高台に移転し、今回の津波からの被害を免れた。防潮堤からは津波で明暗を分けたところが線状に明確に見て取れる。暫くして嘗ての大防潮堤のXの交点に至る。右に伸びていた第二期防潮堤が、無残な損壊の跡を曝し、津波の威力の凄まじさを改めて認識させる。その向こう、堤防に護られていた筈の民家や漁業関連施設の建物は夏草の茂る原と化し、ひとり取り残された格好の、旧田老観光ホテルが震災の記念碑として佇んでいるのが見渡される。その近くでは「ワカメ・コンブ二次加工工場」の建設が、平成 24 年度水産業経営基盤復旧支援事業として、地元の漁業協同組合によって、27 年完成を目指して進められていた。この近海で採れるワカメは上質の物として全国一位の 2000 トン近い水揚げ実績を誇っていたが、震災で打撃を受け、平成 25 年度に漸く 82%まで回復するに至っている。過疎化の流れの中で、他にめばしい産業が見当たらないところから、工場の完成は住民の雇用の場としても大いに期待されているところである。



田老駅で宮古へ向かう列車を待っていると、お婆さんがやってきた。聴けば、第二期防潮堤の内側であったが、津波によって住居を失い、今は宮古の息子の家にいると云う。当時自身は外出中のバス車中で難を免れたが、その後の生活は寒さと飢えに苦しんだと語る。津波で道路が遮断され、必要物資の確保もままならず、三陸鉄道の線路を歩いて買い出しに行ったとつぶやく。損壊した第二防潮堤については第一防潮堤に比べ稍不安を抱いていたが、こんなに脆いものとは思わなかったと悔やんでいたのが印象的であった。

宮古も震災の被害を受けたが、市の中心部ではその痕跡は見当たらない。宮古の台所とされる魚菜市場を覗く。新線な魚介類と、地元の農家で生産された健康野菜が並び、威勢のいいかけ声が響いて、復興の象徴のような光景が広がる。

三陸随一の景勝地と知られる郊外の浄土ヶ浜に足を伸ばす。40 年前家族旅行で訪れて以来である。5200 万年前の古第三紀に形成された火山岩からなる白い岩塊と、同色の小石の浜に囲まれ、外海と隔てられた平穏で清明な入江は、天保年間、宮古山常安寺の霊鏡和尚が、「さながら極楽浄土の如し」と感嘆した通りの、この世とは思えない景観であった。浜に面したレストハウスの二階まで達したと云う津波の状況を、ロビーに掲げられていた写真で見る。そこには打ち上げられた倒木などによって埋められた浜の惨状があったが、今ではすっかり片付けられ整備されて元の穏やかな浄土ヶ浜に戻っていた。岩上に生える一本の岩手の県木「ナンブアカマツ」も、震災に耐え逞しい姿を留めていた。唯、津波を蒙ったためか、夕日を浴びていた所為か、昔の浄土ヶ浜をイメージさせる純白の印象がやや煤けて見えたのには、聊か興をそがれ残念であった。

宮古へ戻る途中、港に面した地区の津波被災地を横切る。漸く復興工事が始まったところの傍らでは、プレハブの小屋でクリーニング店が開かれて、昔の営みが少しずつ戻りつつあるのを感じる。近くの高台には津波の被害を免がれた民家もちらほら見え、その需要に応えるためのことであろうが逞しさを感じたひとときであった。ふとその時足許にどこからか一匹の猫が来ていた。四、五歳くらいだろうか、人なつこい猫で、何かを語りかけたい面持ちで私をじっと見上げている。この辺りを縄張りに行っているところをみると、震災のときどこでどうして難を免れたのか、主人とは別れ離れになったのかも知れない。夕闇の迫る中、身動きもせず私が去るのをいつまでも見送っていた。



震災直後の浄土ヶ浜（現地展示写真）

6、陸中山田・大槌

宮古から三陸海岸を南下する。JR山田線が釜石まで結んでいたが、津波により線路が分断され、開通の目途も立たないまま不通となっている。陸中海岸の中央部に位置する山田町は、震災前三陸地方の良港として知られ、湾内のカキ・ホタテガイの養殖、三陸漁場のスルメイカ・サンマの漁業が盛んで、漁港・加工施設・魚市場も整備され、大型外来船の入港も増えて栄え、人口は約1万 8000 人であった。それが震災により激変する。中心部は津波により流失するとともに、直後の火災により町は壊滅状態となった。死者・行方不明者 755 人、3167 戸の家屋が失われた。復興工事のため町の入り口で撤去されたJR山田線の跡を辿り、陸中山田駅跡に立つ。駅の面影は全くなく、周囲は瓦礫こそ除去されているものの、未整備のままの空間が広がり、一面夏草に覆われている。所々に流・焼失を免れた建物がぼつんぼつんが残っている。災害の凄まじさを彷彿とさせる光景である。嘗て賑わっていた駅前通りを港に向かって歩く。両側に並び立っていた商店も飲食店も跡形もなく消滅していた。国道 45 号線に出ると、水産業で栄えていた営みの跡が、今は廃墟となって夏の日差しを浴びながら解体される日を待っている。津波は人間社会だけを直撃したのではなかった。国道



無残な姿を留める水産業で栄えた営みの跡

を北上すると右手に、小さく佇む祠が目に入る。大杉神社で、石の鳥居は残ったものの、元の社殿は災難に遭い損壊されたため、仮社殿が建てられたものである。神様もさぞ窮屈な思いであろうと恐懼する。町役場の近くに、復興事業の一つとして盛り土工事の看板が掲げられていたが、労力・費用・時間いずれも膨大なものであろう。何よりもそれが完了するまで、元の町並みの再建策もとれない状態で、住民の今後の忍耐と苦労の程が改めて偲ばれる。

山田町の南に位置する、震災前の人口約 1 万 5000 人の大槌町も、三陸漁業と魚介類養殖の水産業の町である。海岸沿いの町は津波で壊滅、山田町より多い 1280 人の犠牲者と 3700 棟の建物被害を蒙った。犠牲者率は 10.7%で宮城県女川町に次ぐ。津波来襲時、町役場では対策本部を設置すべく準備していたが、屋上に避難する前に、町長以下 33 名の職員が犠牲となる痛ましい結果となった。廃墟となった町役場の正面に取り付けられた時計の針は、その悲しい証しとしての時刻を示して止まっていた。元の市街地は瓦礫が撤去された状態の無人の曠野で、嘗てどんな生業が営まれていたのかは全く想像もできない。その中で、江戸時代の町家の遺跡発掘作業が炎天下で行われていた。大災害の中で、歴史にロマンを求める行動は、復興への人々の一つの活動と受けとめられた。

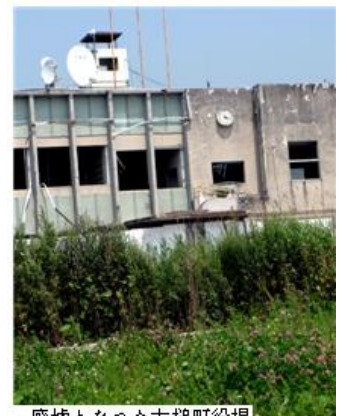


山田町内に掲げられていた復興計画看板

あとがき

春に続き二度目の東日本大震災被災地を巡る旅を終えて、原発被災地については改めて

1. 原発事故被災地の復興について、根本的な放射能汚染物質の処理及び汚染地の回復を促進するため、該当地域(帰宅困難及びそれに準じる区域、廃炉後の福島第一原発・第二原発)を人類共通の負の遺産として、国有化し特定公園として管理保全する。国有化に当たっては該当区域の個人・法人に対しての、不動産買上・原発被災に対する補償・その後の生活・事業に対する支援等の相当の施策を講ずる。その上で当該地の有効活用を図る。
2. 前項に基づき、中央官庁例えば環境省を当公園内に移設する。
3. 地域内の汚染物質の保管を含め、経時的変化、生物に対する放射能の経年的影響等の調査・研究機関を設け推進する。
4. 新技術による汚染廃棄物処理や汚染地の原状回復への有効手段、更には核廃棄

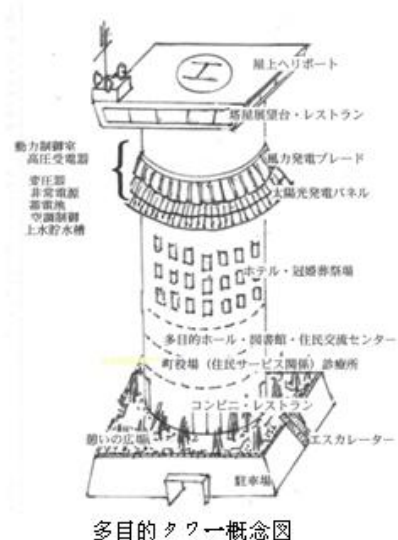


廃墟となった大槌町役場

物の最終処分等に関わる世界的研究開発の拠点とする。

5. 広大な敷地を利用して、太陽光(熱)・風力・潮力・地熱等の自然エネルギー活用型複合発電施設の建設と実用化。その他として関連して
6. 増え続ける核廃棄物の処理も未解決のままに、原発をベースロード電源とする国のエネルギー政策を改め、すべての原発の停止と廃炉、現在の原発立地自治体に対する廃炉に伴う支援のあり方の変更(廃炉事業による雇用の確保・原発に依存しない地元固有産業の育成・再生可能エネルギー発電所の建設等)を緊急課題とする。
7. 将来に対する電力の需給方式を、現在の集中発電・遠距離送電から、分散発電・近接近距離送電へと効率化を狙い、電力需用者(個人も含め)毎の太陽光(風力)発電装置及び蓄電装置の設置を促進するため、それらの装置のコストパフォーマンスの適正化への技術開発及び設備投資に国・民間を挙げて強力に推進する。新経済成長戦略に繋がるとともに、輸出の大きな戦略にもなり得るものとする。
8. 原発事故以外の他の震災被災地も含め、その復興の加速化を図るために、東京オリンピック開催に伴う諸施設(競技場・鉄道・道路・宿泊設備等々)の工事を極度に圧縮し、その費用と労力を被災地の復興事業に充当する。等の対策が喫緊の課題であると提言したい。

次に、過去幾度となく歴史的被害を蒙ってきた三陸の中心部を巡って、今回の津波被災地に対して進められている復興策が、殆ど従来の超大防潮堤の建設と、低地の地盤嵩上げ工事によるものであった。しかしそれらは震災後四年目に入っ緒についたばかりで、今後も長い歳月を待たねばならない状況である。それまで、該当地の住民は土地があっても、住居を構えることはできず、高齢化の進展と忍耐力の限界の中、地域の過疎化への傾斜を一層加速させることにならないだろうか。一方で住民の居住地を高所に移転すると云う対策も平行して執られているところもあるが、相当面積の土地確保と沿岸部の主たる産業である水産業(養殖を含む漁業及びその加工業)従事者の職住遠隔化等の課題を抱え、大きな進展は見られていない。よしんば、これらの復興策が完成したとしても、果たして人々が安心して生業を営むことのできる環境になっているであろうか。昭和三陸津波の体験から建造された田老の大防潮堤は今回の津波で脆くも破壊し、多くの犠牲者を出したし、嵩上げされた地盤の耐力も、大規模造成住宅団地での地盤沈下や地滑りによる災害の例を見れば懸念が残る。わが国の土木技術の水準の高さを否定するものではないが、経年劣化も考えられる人工の建造物に過度に依存することの危険性は今回の震災の教訓として謙虚に受けとめねばならないことではなかろうか。千年以上何代にも亘ってこの土地で生業を続けてきた人々は、今まで幾度となく今回のような災害に遭遇しながらも、自然との共生を図って暮らしてきた。津波で流されても、少しずつ改良しながら又もとの土地に住まいを造って、生計を立ててきた。何はともあれ、地震や津波によって被害を被っても、家屋や町並みは再構築できる可能性をもつものの、人命は取り返しのつかないことを前提に、昔の人々は避難することを第一義に考えてきた。明治三陸津波の後、田老の町並みが、浜から山への道を基準につくられたのもそこにあった。その先人達の知恵に学ぶならば、速やかに緊急避難のできる場所の確保が肝要であろう。近くに高台のない海岸近くの低地に職住接近して居住する人々への対応として、私は、今回の災害によって市街地の大半が津波によって流され、更地になった一角に、耐震・耐津波・耐火の多目的タワーの建造を提案したい。これは津波への対応のための緊急避難を目的とはするものの、通常は地域の流通(コンビニ)・金融・郵便・通信・交通・診療・役所機能等を有しながら、住民のコミュニケーションセンターとしての役割も担い、更には塔屋に展望台やレストランも設けて観光にも寄与すると云った多目的複合の恒久的高層建造物で、震災の復興モニュメントとなればとも考える。勿論、非常時に備えての発電・給水・必要物資の備蓄等、常時自活できるシステムとするのは論を俟たない。将来は地域の名所として、雇用の場を確保し、若者の流出をも防ぎ、住みやすい町造りの核となればとも考える。今後漁業やその関連・流通など生業を続ける上で海沿いを含む低地での活動・居住もやむを得ないとする事情を考慮すれば、そして、一般の建物の耐用年数が百年と考え、百年に一回とも推定される今回のような地震や津波への対応では、土地の嵩上げ(軟弱地盤のおそれ)や巨大防潮堤(環境破壊・水産業への支障・経年劣化のおそれ)による対策よりも、多目的タワーの建設が、時間的、経済的、利用価値等を含めて現実的ではないかと考える次第である。



2014年8月15日

附記

本稿脱稿後1年が経ち、現地の事情も可成り変化しています。先日再訪したところでは、JR常磐線は竜田まで運転区間が延長され、竜田から原ノ町までの不通区間には、国道6号を経由しての直行の代行バスが運転され、仙石線・石巻線も全線復旧しています。震災の遺構として残存していた各地の建物や構造物(JR常磐線富岡駅など)は撤去され更地化されていましたし、陸前高田や女川などの市街地地盤嵩上げ工事や大船渡など10mを超える高さの海岸堤防の建設はそれなりに進んでいるようですが、風光明媚とされた三陸沿岸地域の多くの元市街地は、人工による赤土とコンクリートの無人の荒野と化しているのが現状です。原発被災地では依然として徐洗作業が続けられ、放射性廃棄物が増え続けています。檜葉町は9月5日を期して町民7400人を対象に避難指示を解除する通達を出しましたが、住民のうち若壮年層の大半は帰郷に慎重だと云います。現に私が代行バスの車窓から見た双葉町(帰宅困難区域)の国道6号の路傍に設置されているモニタリングポストの示す放射線量は $1.57\mu\text{Sv/h}$ と今尚危険な数値でしたし、竜田駅前(檜葉町)のものでも $0.204\mu\text{Sv/h}$ と、子育ての人々が安心して住める状況ではないと思われました。1年間の進捗状況を見て復興の道のりは遅々として遠いと言う感じを新たにしました次第です。

2015年8月16日